

# 戦後自立演劇運動における「自立」と「連帯」

一橋大学大学院 長島祐基

1 目的・課題：本報告では戦後（1950年代）大阪を中心として展開した、労働者による演劇創造・上演運動を事例として、この時代の文化運動の存立基盤と社会各層との連帯の可能性を考察する。近年、1950年代文化運動研究が盛んに行なわれている。政党／政治勢力対立によって語られることが多かった1950年代の運動における人々の抵抗のあり方の見直しがその背景にはある（道場2016）。サークルでは水平的な関係性や地域や職場の「つながり」が重視され（天野2005；大森2006；長崎2013）、前衛の指導や政党の方針、知識人の理想像に時として左右されながらも、人々が様々な形で自立的な主体形成を実現していった（神長2012；竹内2014；道場2016）。演劇運動は労演（勤労者演劇協会）が大阪で結成される（1949年）など、音楽や映画と並んで大衆性を獲得した運動（高岡2011）。であり、労働者の手による演劇創造・上演運動は自立演劇運動とされた（関西学院大学博物館編2011）。しかし、演劇はうたごえや詩、生活記録などと比べて研究蓄積が薄い。また、作品に現れる労働者の主体化過程を読み解いた既存の研究も含めて、1950年代文化運動において文化活動そのものの自立性を担保する条件は労働組合の強さや「工作者」の存在（道場2016）などを除くと中心的なテーマとなつて来なかった。

2 方法：大阪労演、大阪府職劇研を始めとする各種サークルの機関紙や執筆された創作劇の台本等の資料（関西学院大学博物館所蔵）、サークルが属する労働組合の機関紙や年史（大原社会問題研究所、大阪産業労働史料館所蔵）に加え、当時を知る関係者への聞き取りを行った。機関紙や聞き取りを通じて事実関係や労働者たちが演劇に対して抱いていた感情を読み取ると同時に、創作劇の台本もデータとして用いている。また、創作劇には演劇の創造過程を描いたものや実際の闘争をモチーフにした作品が創作劇で描かれていることから、労働者たちの意識や当時のミクロな人間関係を探るヒントとして重要と考え、データとして用いた。

3 結果・結論：自立演劇運動では商業演劇や専門演劇からの「自立」が重視された（大橋1972）。そして自立演劇運動の存立において重要な要素が稽古場と稽古時間の確保と発表の場の確保である。練習場所と時間の確保には労働時間の短縮や職制の圧力をはねのける点で労働組合の力が不可欠であり、発表場所の確保に当っては労演が発表会の開催や場所の確保などの点で大きな役割を果たした。同時に演劇は一人では出来ない文化活動であり、集団創作、集団発表の形をとることになる。サークルのメンバーはメンバー相互の討論を経て職場の問題を描き、発表会を通じてサークル同士の相互交流を図ると同時に、実際の運動の現場の調査や巡回公演を通じて社会各層とのつながりや連帯を模索した。その中で職場の女性の声や闘争の実態等が取り入れられることになる。当時のサークルの劇創造過程を描いた作品には知識人の理論から出発するのではなく、自分たちの経験から劇が作られて行く様子が描かれている。しかし職場の問題や実際の闘争を描くことは同時に組合の方針とぶつかる面もあった。

## 参考文献

天野正子, 2005, 『「つきあい」の戦後史——サークル・ネットワークの拓く地平』吉川弘文館。  
道場親信, 2016, 『下丸子文化集団とその時代——一九五〇年代サークル文化運動の光芒』みすず書房。